

●文化の走者、神奈川の友に贈る

正義の旗  
平和の心



SEIKYO SHIMBUN

詩人は

海を見ていた

埠頭に立って

夜明けを待った

世紀の海は

薄明に包まれ

碧き海に

金の光が走った

波間より

しらとりは天高く舞い

船は 汽笛を響かせ

船体を紅に染めて

大洋に向かう

ああ 神奈川に

元初の旭日は昇った

その光は

詩人の胸に燦々と降り注ぎ

あの街々を

愛する友の家々を

あなたたちの笑みの顔を

生きいきと照らした

神奈川――

「進取」と「自由」の天地よ

かつて ペリー浦賀に來りて

横浜の港は開かれ

鎖国の眠りありし国に

新しき文明の光送る窓となった

以来百三十年――

世界を結ぶ

文化と友好の先駆けとなった

港・ヨコハマ

そこには 多くの人の歴史を

繋ぎながら

輝かしい地球人時代の

シンフォニーが流れている

そうだ

創価文化の歴史に

新たな一ページを画したのも

先進の大地・神奈川の友だ

5

ああ 忘れ得ぬ 世紀の祭典

第一回神奈川青年平和音楽祭――

鮮やかな色彩美と

歓びの旋律でつづった

絢爛にして華麗な大交響詩よ

昭和五十九年九月九日

降りしきる雨の中

新装の横浜スタジアムを

感動の増場と化したその光景は

いつまでも いついつまでも

私の脳裏に焼き付いて離れない

優雅なワルツ

勇壮なマーチ

6

情熱のサンバ

懐かしい童謡もある

オーケストラと邦楽器の「荒城の月」

素材な手作りのスチールドラムの乱打

シンセサイザーの響き

クラシックも

若者の新しい音楽も

生きる喜びをいっぱいにはじけさせ

平和の心を奏でた

世界の各地に生まれた音楽が

国境を超え

言葉の壁を超えて

四万の友の生命の共鳴板を

優しく強く 激しく叩いた

7

音楽とは世界の言葉

文化とは融合の力

民衆と民衆の心を結ぶ

人間文化の大波が

この神奈川の地に

起こり 広がったのだ

感慨うねる私の胸に

恩師の大獅子吼が

あの「原水爆禁止宣言」が

電光のごとく駆け巡った

昭和三十二年九月八日――

懐かしき三ツ沢競技場で

開かれた「若人の祭典」

台風は一過し 爽やかな天下晴れに

赤い夾竹桃の花が静かに笑っていた

そして

グラウンドには

純白の輝くシャツの

乱舞がまぶしかった

その青年の躍動を

終始 見守っていた慈眼の恩師は

最後にマイクの前に立ち

凜乎として叫んだ

世界の民衆には生存の権利がある

それを齎かすものは魔ものなり——と

いかなる国 いかなる民族であれ

核を使用するものは悪魔なり——と

そして

その思想を全世界に広めゆくことを

「遺訓の第一」として

青年に託したのだ

時に 恩師 齢五十七

逝去の七カ月前

襲いくる病魔と戦いながらの

烈々たる命の叫びであった

ああ ガンジス 長江の大河も

山奥の一帯から始まる

東方の一角より

人類に警鐘を打ち鳴らした

この叫びこそ

今 二十一世紀への一大潮流となつて

青き地球をひたひたと包みゆく

創価の平和運動の水源なのだ

私は この叫びを この宣言を

片時も 忘れることはなかった

その実現のための

我が生涯と決定した

そして恒久平和の開拓者と立った

道なき道をひた走った

歳月は巡り 二十七星霜

若き青年の意気は

雨中に 美事なる

文化の大輪を咲かせた

恩師の思想を

今に 未来に伝え

開国以来の由緒漂う

戸田平和記念館の立つ

この横浜の地に――

ああ 平和の電源地

文化創造の都・神奈川よ

宗祖日蓮大聖人は

「立正安国」の旗を掲げ

苦惱渦巻く鎌倉の都に出でて

権力の強圧と戦い

民衆の只中で法を説かれた

古の都・奈良でもなく 京都でもない

人里離れた山間の林でもない

人間界の矛盾と軋轢の集積せる

この鎌倉の地を

法戦の主戦場とされたのだ

そして まことに 刀尋段段壞

久遠元初の御本仏として

発迹顕本されし宝土の竜の口

奇しき 奇しき

仏法有縁の国土・神奈川よ

海と 山と 緑の

風光明媚なる景観に

豊かなる歴史と

限りない未来を秘めたる天地

文学の芳香漂う

藁苔むす古都・鎌倉の静寂

北条早雲の本拠・小田原の

古城のたたずまい

世界の船来り

私が童話に描いた 青い目の人形も

はるばるやって来た

文化の新風吹き渡る港・横浜

そして 横須賀

点々と工場の火揺れる

湾岸に延び広がる京浜の工業地帯

箱根 足柄 丹沢の峰々の

四季の彩り美しく

相模湖 津久井湖 芦ノ湖は

夕やけ こやけ のおとぎの風に

歓喜の乙女の響きがこだまする

詩情の江ノ島 城ヶ島

夏が来れば

照り映える太陽の下

湘南の海に弾む

若者の歌 青春の曲

工業の栄えあり

自然の恵みあり

人はこの地を愛し

年ごと 日ごとに

繁栄の光は広がる

おお 伸びゆける新世紀の王者よ

神奈川には

また 創価の輝かしき歴史あり

広宣の火は

戦前の暗夜にいち早くともり

戦後の荒廃のなか

神奈川の同志は

恩師のもとへ

一人 また一人と

求道の歩みを運んだ

恩師は その友を 無名の青年を

掌 中の玉のごとく愛し 慈しみ

大きく包みながら

全魂を傾けて育んだ

あの地 この地を訪れ

貧しき庶民の家々に

幸の座談の明かりをともし

苦悩にすすりなく人にも

偏見深く 怒りたつ人にも

諄々と あふれる確信をもつて

法を説き 語った

草創の友よ

あなたたちは ひたぶるだった

財も 名誉もなくも

清らかな健気なる心があった

何ものも 誰人も恐れぬ

気高き勇気があった

一途に ただ一途に

弘法の営れに生き

宿命にうちひしがれた友のために

忍耐強く対話を重ねた

尊き仏子らの

闘魂は炎と燃え

昭和二十六年四月二十日

聖教新聞創刊号に

「聖火鶴見に炎上」の見出しは躍った

天をも焦がす

神奈川健児の心意気を示したのだ



私も 神奈川の黎明に駆けた

意義深きこの大地に

壮大な広布の一大拠点を創ろうと

虹の未来を思い描いて

若武者らしく

力の限り 走り抜いた

私の懐かしき思い出は尽きない

第三代会長就任の翌年

国立競技場での

男子部精鋭十万人の集いに次ぎ

三ツ沢競技場を埋めた

花の乙女ら八万五千

後世に「女子部の日」の

意義を刻みたる

歴史的な第九回女子部総会

幾たびも訪れた神奈川の研修道場

水滸会 華陽会

そして 鳳雛会 未来会の野外研修

狭霧の中に赤々と燃えた

若き友の情熱のかがり火よ

そこは 人材鍛錬の要地であり

次代のリーダーたちの立志の天地だ

四十五年 民衆勢力の台頭を

砕かんとする激浪に一人抗し

永き疲れの蓄積に

高熱が続いたあの時も

私は 研修道場にいた

あなたたちの

純真無垢なる憂え顔に接し

負けまい 断じて負けるまいと

自らを鼓舞して起き上がり

命を振り絞る思いで

小説「人間革命」の

口述をつづけた

また

地域に友好の花の輪を広げゆく

三崎の友との夢躍る語らい

鎌倉の友の誓いの瞳

平塚での

剎那を永劫にとどめし記念撮影

川崎での

新しき旅立ちの本部幹部会

横浜の文化体育館の幹部会に

臨みしことも幾多あり

思えば「七つの鐘」を鳴らし終えて

会長を勇退した折

真つ先に訪れたのが

神奈川文化会館であった

あの時も怒濤は猛り競い

我が学会丸に

容赦なく

障魔は牙をむいて襲いかかった

私は 心美しき友を乗せ

幸いの島へと運びゆく船が

濁流に吞まれゆかんとするのを

見過ごすわけにはいかなかった

自ら傷つくことは辞さない

たとえ 命を賭すもよし

しかし 仏子として

戸田先生の弟子として

仏法正義の証明だけは

断じてなさねばならない

そして 苦しみ 悲しむ同志を

何としても 守らねばならない

私は 私の立場で――

それは 私の義務だ

自らが 自らに課した責務だ

時は まさに烈風 豪雨のさなか

中傷のつぶては一身に注がれていた

しかし 我が心中に青空あり

いよいよ 赫々と昇る太陽あり

そして 何よりも

御本仏の無上の励ましあり

「我今度の御勤気は

世間の失一分もなし」と

五月五日 創価学会後継者の日に

平和記念館に恩師をしのび

世界に広がる海を眺めつつ

私は 筆を執った

「正義」――

それは

一人の信仰者として決然と立ち

我が生きざまをもって

その二字を証明せんとの

誓いの刻印であつた

二〇〇一年への

人知れぬ決意の旅立ち

神奈川は

我が新しき船出の港なのだ

やがて 私は

鉄鎖を断ち

勇猛に 果敢に 自在に

嵐すさぶ雷鳴の野を行く獅子のごとく

広宣の大地を疾駆した

ただ ただ 愛する会員のために

友よ

真実の信仰とは

立場や地位では決してない

どこにあっても いかなる時も

自らの使命に徹し

己が信念のままに

何ごとにも屈せず 腐らず

「いよいよ」の心で 黙々と

我が人生のテーマを果たしゆくことだ

ここに信心の王道あり 直道あり

愛する神奈川の友よ

あなたたちは 私とともに

新世紀の海原を目指し

人類平和の

プレリユード(前奏曲)を響かせた

今 船は

創立六十周年の曙に照らされ

「正義」の旗を朝風になびかせ

金の光彩に 銀の波を立てて

暁の海をひた走る

古来 幾多の「正義」があった

戦争と殺戮の旗振り役を演じてきた

血塗られた「正義」

弱者の感傷の拠り所となった

悲しい「正義」

独断と自己満足のセクトに閉ざされた

逼塞した「正義」

いたずらに観念の谷間を

こだまするだけだった空しい「正義」

人類史とは

そうした「相対的正義」の

せめぎ合いの歴史

それらは 相対的なるがゆえに

人間と人類のための

最後の凱歌を奏することができなかつた

我らの「正義」とは「絶対的正義」

それは 人間と生命とが

無条件に尊貴なることを断じ

いかなる弾圧 誘惑にも

その命題を掲げて一歩も退かぬ

一人の人間の天空よりも広き

境涯の確立である

ゆえに 我らが「正義」は

全民衆の幸福と平和のための

不動にして普遍なる

人間としての規範

分断 破壊に対する

融合 創造の機軸だ

友よ 忘るまい

そして その旗は

自らを律し 己に克ち

名聞名利を超え得る

良心と勇氣によつてのみ

掲げ続けることが出来るということ

パスカルはいう

「力なき正義は無効」

「正義なき力は「圧制」と

透徹した理念という方向と

力が備わつてこそ

時代を牽引する

「正義」のベクトルは成る

君たちよ あなたたちよ

「正義」 必ずしも勝つとはかぎらぬ

肝要なのは 「正義」なるがゆえに

断じて勝たねばならないという

我らの強靱なる不退の一念だ

「仏法は勝負」だからだ

そのために

自己を磨こう 力をつけよう

力とは 真剣だ

力とは 信頼だ

力とは 実証だ

力とは 持続だ

また 力とは 団結だ

必死の一人は万人 万軍に勝る

なれば

必死の万人のスクラムは

太陽のごとき

原子と原子の核融合のエネルギーを放つ

時代は 今や

民衆が主役の座を回復せんとし

権威 権力 はたまた 金力 財力に

人々が追従する時代は

終わりを告げようとしている

さらに

理論や弁舌の巧みに

心酔し 行動する時代でもない

人間そのものを直視し

人柄に共感してこそ

納得 賛同する

人格の時代に入った

相模の依智は本間邸に

留め置かれし大聖人に

掌を合わせ

邪義を捨てる誓いを立てし

警固の兵士多々あり

その御振る舞い

高潔にして雄大なる御人柄に

心打たれ 敬服したるがゆえなり

これ人格の力なるか

人格は 人間の総合力

人の持つ生地の輝き

礼儀 良識 誠実 思いやり

そして 忍耐 情熱 公平無私

それらの骨格を成す信念

信仰は人格を培う

ゆえに

人柄こそが信仰を映し出す鏡

強盛なる信心の人

また 勝れたる人格の人で

なくてはならない

君たちよ あなたたちよ

社会にあつて 地域にあつて

誰からも 慕われ 信頼される

人格光る

一人一人であつてくれ給え

そこに

信仰正義の証があり

広布の一切の鍵があるからだ

神奈川文化会館には

各国の法友が喜々として集い

交歓の語らいのうちに

友情のハーモニーは響き

平和の聖火を手に

祖国の空へと羽ばたいていく

また 世界の各界のリーダーも

多く ここを訪れ

私と 信義の対話を交わした

胸襟を開いての

率直な意見の交換

真心の触れ合いは

不朽の友誼を結び

万代の和平への錦を織った

神奈川こそ

世界を結ぶ平和と文化の港にして

国際化時代の先駆けなのだ

妙法の国際人の出発ゲートなのだ

愛する 愛する

君たちよ あなたたちよ

恩師が託した平和の心をいだいて

この港より陸続と船出してくれ給え

私とともに金の航路を

文化の走者 平和の走者として

さっそうと 胸張り進み

太平洋はるかに また はるかに

友情の虹を懸けてくれ給え

そして ここに

我が町 我が近隣 我が職場に

「友よ 見てくれ

これが地球の平和の縮図だ」といえる

幸と歡喜の

アルカディア(理想郷)を創りゆこうよ

あなたこそが

そのパイオニアにして

人間外交の全權大使なのだ

ああ 水平線の彼方に

昇る太陽は

新しき活力にあふれた

満天の慈光を

今日も我らに降り注ぐ

爽やかな朝の大気を胸一杯に

青年の太陽と

笑みを交わしつつ

人生と生活と芸術の香りを包みながら

また人間の名画を描きながら

さあ 悠然と

不二の広宣の黄金道を歩みゆこう

どこまでも どこまでも――

昭和六十三年六月十日

神奈川の同志のご多幸と

ご活躍を祈りつつ

学会本部にて

桂冠詩人